都市計新聞

発行者：
奥村，砂
坂井，島津
戸髙

卒論発表を通して

皆さんお疲れさまでした

2月21日に学部生の卒業論文発表会があり，1年間の研究の成果について発表を行った(図1)．個人に与えられた時間は，発表時間6分，質疑応答4分の計10分となっている．

準備期間で大変だったところは，発表時間内に伝えたいことを簡潔にまとめないといけないこと，研究内容を初めて聞く人でも理解できるような説明をしなければならないことであった．初めに作成した資料では，無駄な説明や発表内容の繰り返しにより，発表時間を大幅に超えていた．そこで，それぞれの研究で一番伝えたいことを意識し，説明順序や言葉を適切に使うように修正した．その結果，初めて聞く人でも理解しやすい資料が完成し，自分の主張を時間内に伝えきることができた．

発表会を通し，たくさんの人とプレゼン内容を議論することで，自分にはなかった新たな視点や情報を取り入れることができた．この経験を通じて，改めてプレゼンの大切さを感じることができた．プレゼンの能力は，社会に出ても必要であるため，今回の経験や反省を今後の自分の糧にしていきたい．

図1 卒論発表会の様子

卒業する学部生

私たちが，4月から都市計の研究室に配属され，早1年が経った．今年度は，対面での研究室活動が増えたことによって，より密な研究活動ができたと思う．4月の交流会や，ボウリング大会を通して親睦を深めることができた．7月まで行った全体ゼミでは，発表の機会を通して，人前で喋ることの抵抗感が無くなり，また論理的思考力を磨くことができた．11月には，インドネシアから留学に来たナディフ君と交流し，多様な価値観に触れる良い機会となった．

そして，卒論に本格的に取り組む時期になり，遅くまで研究室に残ることが多くなった．そんな中でも，研究室仲間と切磋琢磨し，時には息抜きに食事に行くなど，良い環境で研究に取り組めたと感じている．これらの経験は，対面でなければ経験できなかったことだと思う．

この1年間では，社会人になっても生きていくための基礎的な力がついたと思う．

図2 卒論発表を終えた学部生

都市計 OB 情報

2018年3月に卒業された先輩に

インタビューしました。

名前　松下聖史
卒業年度
２０１７年度
勤務先
西日本高速道路株式会社
仕事内容
九州支社管内の標識更新工事の発注計画の作成や、事務所・受注者との施工内容の調整、接触事故防止策の検討など
研究室での思い出
修論テーマを直前に変えて2か月で仕上げたこと
学生時代にやっておけばよかったこと
国内ほぼ制覇していたので、海外にもっと行っておけばよかったと思います．あと、資格関係！
学生へのメッセージ
あんなに長い休みや、みんなで勉強したり遊んだりすること…社会人になるとめったにありません（笑）今のうちに、学生だからできることをとことん楽しんでください！
先生方へのメッセージ
先日はお世話になりました！コロナ前はプライベートや環建の就活関係でお会いしていましたが、時間が空いてしまいましたね…またお会いできることを楽しみにしています！

社会の断面

人間とAIの違い

アマチュアの囲碁プレイヤーが、最強レベルの囲碁ＡＩに勝利したことが話題となっている。囲碁ＡＩは人間が行う戦術についての学習を行っている．そのため，人間は既往の戦術ではＡＩに歯が立たなくなっていた．しかし，コンピュータが囲碁ＡＩの弱点について分析した結果，アマチュアのプレイヤーがＡＩに勝つことができた．理由は，対ＡＩ用に考案された特殊な戦術であったため，人間が容易に理解できるような状況でもＡＩには対応が出来なかったからだ．

この事例を踏まえ，人間が当たり前のようにできることでもＡＩは学習をしなければできることはない．そのため，ＡＩの運用を行う上で，人間とＡＩの違いについてよく理解していくことが重要であると考える．

卒業旅行のススメ

学生の皆さんは論文の提出も終わり、卒業旅行を控えているところだろうか。旅行先の選択肢として海外を考えている人も少なくないと思う。私は昨夏、友人とエジプトに行ったが滞在中COVID-19に感染し、現地の病院で2週間入院生活を送った。卒業旅行前の注意喚起としてその体験談を書き記しておく。

症状が出た時の状況

赤道に近いルクソール市は8月の平均気温が43℃日本　では経験することのない暑さを感じるはずだが、私は到着後から上着を脱げないくらい寒気を感じていた。宿泊先として、プール付きのヴィラを予約していたが、ダイブしたのはプールではなく、硬めのベッド。解熱剤を飲んだが体調は回復せず現地の病院へ連れて行ってもらった。

しかし医者には、「この薬飲めば治るよ」としか言われず、おでこで測る検温器は38度と表示した。喉、頭、関節の痛みに加えて吐き気、下痢など体調不良の症状を制覇していたため、その結果が信じられなかった。その後、気絶するように眠っていた私の姿を見た友人が、救急車（図3）を呼び何とか一命を取り留めた。当時の健康状態の記録を確認すると、40・6度の高熱を記録していた。

入院生活

外国人旅行者を受け入れる病院で、英語が通じたのが不幸中の幸いだった。滞在中は、毎朝毎晩、点滴を3種類ずつ打ち続け、2週間集中的に治療にあたってくれた。担当医は25歳の新人とは思えないほどしっかりしており、安心して命を預けた。

通信容量も限界に来ていたため、入院中ならではの娯楽を満喫した。まずは看護師にアラビア語を教えてもらった。結局、挨拶しか話せないまま退院することとなった。次はタオルアートだ。部屋掃除のおばちゃんと一緒に作品を生み出した（図4）。他は連絡や手続きなどで毎日何かに追われていた。食事については、同じ朝食、4択のランチ、4択のディナーだった。組み合わせ方が16通りだから飽きないように工夫するしかないな、などろくでもないことを考えていた。

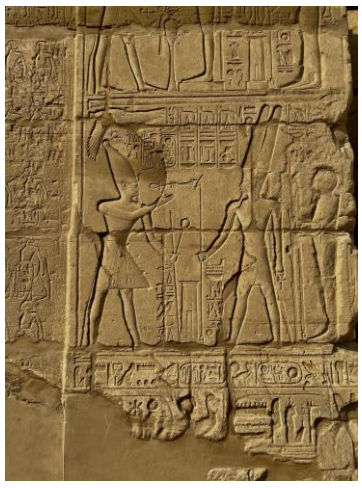

図5　カルナック神殿の壁画

図4　病院で生み出した作品

図3　私の命を救った救急車

旅行前の皆さんに伝えたいこと

・行きたい観光地は最後まで残さない

旅行中は急なハプニングが発生し、思いがけないところで足踏みをするかもしれない。その結果スケジュールが大幅に後ろにずれ込んだ場合、その国に来た感がある観光地（図5，6）に行けない可能性も十分あり得る。自分にとって重要な観光地は、何よりも先に行くべきである。

・海外旅行保険には確実に入っておく

入院費、治療費などかかった費用の総額は約4万ドル。当時のレートで約575万円だった。私は幸い旅行保険に加入していたので、たった8千円の負担で全てを補うことができた。これほど保険の存在に感謝したことはなかった。私のように病気にからない場合でも、器物破損や飛行機の遅延などに対応しているものも多く、その存在感は計り知れない。よく分からない人は保障の手厚いプランを契約しておこう。

図6　初日に行ったピラミッドとスフィンクス

・小さな発見を楽しむ

こんな波乱万丈な経験をしたため、そちらに目が行きがちだが、旅行としても十分楽しむことができた。ナイル川の水の流れ遅すぎる！（図7）、と肌で感じたり、右利きの人でもアラビア語をすらすら書いていた（アラビア語の文章は右から読みます）り、目的地に行く過程で思いがけない発見ができることが旅行の魅力である。

いい写真をたくさん撮って後で見返すことも楽しみの1つだが、自分がいる場所を見渡せば小さな発見であふれている。皆さんも旅行中はスマホの画面ばかり見すぎず、目の前の景色から得られる自分なりの小さな発見を楽しんでほしい。

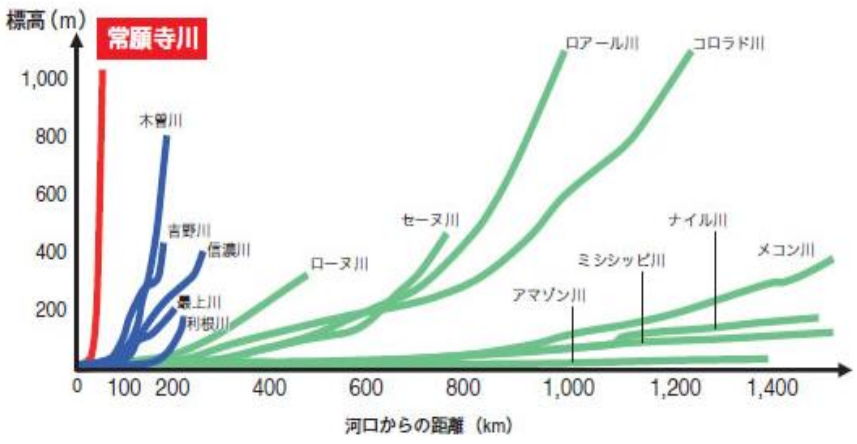

図7　世界の主な河川の勾配

https://www.hrr.mlit.go.jp/tateyama/jigyo/tokucho.html